

【目的】 現代の青年は「子ども」をどのように捉えているのだろうか。子育ての意義や親としての責任を認識することは、青年期の重要な課題項目の一つである。

本研究は、これから親になる世代である女子大学生と、既に親である幼稚園児の母親を対象に調査を行い、両群の回答を比較することにより検討する。それにより「自らの子ども期」を振り返り「わが子」を展望することを通して、人間発達と世代的つながりの視点に気づくことを促し「親性」の育成に対する示唆を得たいと考える。

【方法】 調査対象者は、女子短期大学に在学する学生407名と幼稚園児の母親248名の計655名である。調査表は10個の設問項目から成る文章完成法であり、刺激語を提示してそれに対して思い浮かぶことを自由に記述する。調査時期は、平成9年9～10月である。

【結果と考察】 ①「子どもは」の刺激語に対して、元気・かわいいは両群とも多いが、うるさい・小さいは学生群に、宝・活発は母親群に多い。②「わが子は」には、両群とも4割がかわいいと答え、母親群は大切・いとおしい・難しいが多い。③「私が子どもだったとき」には、学生群が生意気・かわいい、母親群は遊んだ・自由・のびのび・幸せが多い。④「これからの子どもは」には、学生群は生意気が多いのに対して母親群は大変・かわいそう・自分をしっかり持って・思いやりある人が多い。⑤回答数は母親群の方が多く、プラスイメージが多いもののマイナスイメージは相対的に「子どもは」「私が子どもだったとき」の学生群で多い。「わが子は」の母親群はプラスもマイナスも多い。⑥これらの結果から、学生群に比べて母親群の回答は多様でかつ両価的な場合が多く、「子ども」に対する視点の多面性がうかがえる。